

令和 7 年 12 月 4 日

大学院学生各位  
To All Graduate Students

令和 7 年度  
基盤医学特論 開講通知  
Information on Special Lecture Tokuron AY2025

題目：アルツハイマー病診療の現状と将来展望  
Title: Current status and future prospects for Alzheimer's disease therapies

講師：小野 賢二郎 先生  
金沢大学医薬保健研究域脳神経内科学・教授

Teaching Staff: Kenjiro Ono MD, PhD  
Department of Neurology, Kanazawa University Graduate School of  
Medical Sciences, Professor

日時：令和 8 年 1 月 29 日（木）17:00－18:30  
Time and Date: Thursday, January 29, 2026.

場所：環境医学研究所 南館大会議室  
Room：Research Institute of Environmental Medicine, Room S204

使用言語：日本語  
Language: Japanese

アルツハイマー病（AD）の日常診療で使用可能な治療薬であるコリンエステラーゼ阻害薬と NMDA 受容体拮抗薬は、症状改善薬に留まるため、病理変化自体を食い止める根治的治療法の開発が急務であった。

AD の病理学的特徴としては、アミロイド  $\beta$  蛋白（ $A\beta$ ）から成る老人斑、タウ蛋白（tau）から成る神経原線維変化、神経細胞死があげられる。なかでも病態生理においては、 $A\beta$  が異常凝集して神経細胞を傷害する過程が重要な役割を果たすと考えられている（アミロイド仮説）。

この仮説に基づいて、アミロイド PET や脳脊髄液の  $A\beta_{42}/A\beta_{40}$  比などのバイオマーカーが開発されるとともに、2023 年に抗  $A\beta$  抗体であるレカネマブ、そして 2024 年にドナネマブが本邦で使用可能となった。ただ、アミロイド関連画像異常（ARIA）などの副作用を軽減させることが現在の大きな課題となっている。

トロンティネマブは、抗  $A\beta$  抗体であるガンテネルマブをベースに血液脳関門を通過するトランスフェリン受容体（TfR: transferrin receptor）結合モジュールを融合した抗体で抗  $A\beta$  抗体を脳側へ能動的に移行することが可能となった。

低分子薬として注目されている ALZ-801 は、APOE $\epsilon$ 4 ホモ接合の軽症 AD 患者を対象第 3 相臨床試験が行われ主要評価項目 ADAS-Cog 13 の変化量に関して全体では達成できませんでしたが、サブグループ解析で軽度認知障害群では有意な認知機能低下抑制が報告されている。

本講演では、AD の最新治療と今後の薬剤に関して抗  $A\beta$  療法を中心に薬理的機序も含めて述べる。

\* 関係講座・部門等の連絡担当者: 環境医学研究所 病態神経科学分野 山中宏二（3867）  
Contact: Neuroscience and Pathobiology, Research Institute of Environmental Medicine. (Phone; Ext.3867)  
[注意] Notice 事前の申込みは不要です。No registration required.

医学部学務課大学院係  
Student Affairs Division, School of Medicine